

禁帶出

宮城町文化財調査報告書第4集

# 蒲沢山遺跡

## 遺跡詳細分布調査

(昭和58年度)

昭和59年3月

仙台市教育委員会文化財課  
宮城町教育委員会

正 誤 表

番号	ページ	行・図	誤	正
1	P 1	27行	貴葉山丘陵	貴葉山丘陵
2	P 2	第1図	道路の位置と周辺の道路	
			○ ○ <sup>20</sup> 19 ○ 21	○ ○ <sup>20</sup> 19 ○ 21
3	P 4	第2図	道路地形図および調査区域 スケール 0 50 100	
4	P 6	9行	10 13 17	10 13 16 17
5	P 13	7行	第Ⅲ~Ⅳ類として	第Ⅲ~Ⅴ類とした
6	P 16		石器実測図スケール 0 5 10	
7	P 19	20行	成形 知能	成形 操作
8	P 26	2行	南西端	西南端
9	P 33		出土遺物石器(3) 1638 1639 1645 1646	1639 1638 1646 1645
10	P 37		出土遺物石器(4) 1649 1650 1651 1652 1653 1654	1651 1649 1654 天地逆 天地逆 1650

## 序

わが宮城町は県の中央西部に位置し、町の北西部には船形山を中心とする奥羽の秀峰が聳え、中央部には東に向って広瀬川の清流が流れています。このように緑と水の自然に恵まれたわが町は、一方では都市化が進み大きく発展しています。

近年、当町も他の開発の進んでいる町と同じように開発と埋蔵文化財の保護との調和が一つの課題となっております。現在、宮城県遺跡地名表(昭和56年2月)によれば町内に点在している遺跡は132個所が確認されており、今回発掘調査を実施した「蒲沢山遺跡」もそのなかの一つであります。

調査の結果によりますと、この遺跡からは縄文早期末から前期の住居跡と多くの石器などの遺物が出土しました。この時代の住居跡がこのように纏って検出された点では県内でも数少ない部に入るものと考えられます。また石器につきましては精巧な石鎌、石槍などが多数出土しております。

文化財は元来私たちの祖先が創造した文化であり、現在残されている数少いものであります。そのどれもが固有の価値をもっているものであり、私たちは祖先が残したこの貴重な文化遺産を子孫に継承していく義務があると考えるものであります。この報告書が広く活用され、埋蔵文化財に対しての関心がいっそう深まることを期待しております。

最後に、本年は例年ない悪天候のため、調査は困難をきわめ、発掘調査に当った方々に格別のご苦労を煩わしました。また報告書作成に多大のご指導・ご協力を頂きました方々に心からの感謝の意を表し、ご挨拶といたします。

昭和59年3月

宮城町教育委員会

教育長 田中勝三

## 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	1
III 調査の方法と経過 .....	3
IV 調査の成果 .....	5
1 基本層位 .....	5
2 発見された遺構と遺物 .....	5
(1) 遺構とその出土遺物 .....	6
(2) 出土遺物 .....	9
① 縄文土器 .....	9
② 弥生土器 .....	12
③ 石 器 .....	18
V まとめ .....	26

## 例 言

1. 本報告書は、昭和58年度文化庁国庫補助事業として実施した蒲沢山遺跡の遺跡詳細分布調査報告である。
2. 遺跡の所在地 宮城県宮城郡宮城町茅沢字蒲沢山
3. 調査主体者 宮城町教育委員会
4. 調査協力 赤坂土地区画整理組合準備委員会
5. 調査担当 宮城町教育委員会社会教育課
6. 調査期日 昭和58年8月19日～昭和58年10月31日
7. 調査面積 調査対象面積70,000m<sup>2</sup>　調査面積17,800m<sup>2</sup>
9. 本報告書の編集・執筆は、宮城町教育委員会社会教育課が行った。
10. 本遺跡の調査、整理に関する記録、出土遺物は、宮城町教育委員会が保管している。

## I 調査に至る経過

宮城町教育委員会は、宮城町赤坂土地区画整理事業に係る蒲沢山遺跡（宮城県遺跡地名表番号21132）の遺跡詳細分布調査を昭和58年度国庫補助事業として実施した。

調査は、区画整理事業を実施するに当たり当該遺跡の保護を図るために協議資料を得ることを目的とした。

昭和55年5月30日、宮城町教育委員会及び宮城町赤坂土地区画整理事業組合準備委員会は、宮城県教育庁文化財保護課より当該事業に先立つ詳細分布調査の必要があるとの指導を受けた。

これを踏まえて、町教育委員会及び宮城町は昭和56年・57年、県教育庁文化財保護課より調査方法等について指導を受け、さらに当該準備委員会と協議を重ねた。その結果、町当局は当該調査の実施を国及び県の補助事業として検討することとした。

昭和57年10月、国及び県に補助事業計画を提出し、昭和58年4月19日、町当局は補助金交付申請を行った。

当該補助事業は昭和58年4月20日に発掘届を提出し、翌年3月22日、宮城町文化財調査報告書第4集を刊行し終了した。

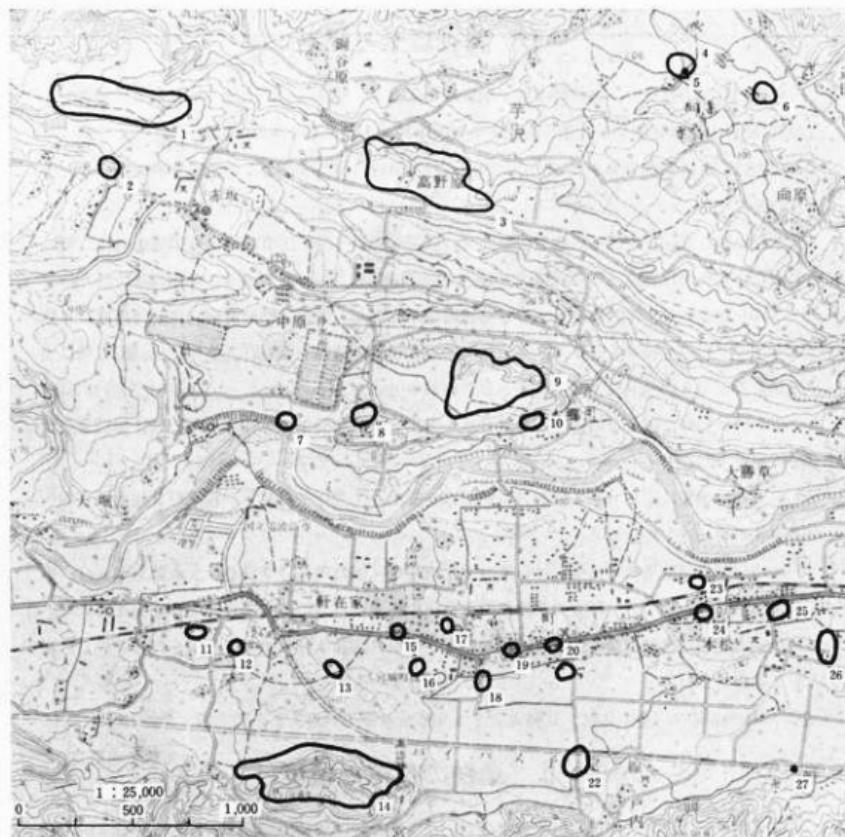
この間発掘調査用機材置場については、赤坂土地区画整理事業組合準備委員会の協力により、事務所の1室をお借りし、調査の前段階の伐採伐根作業等についても便宜を図っていただいた。又発掘調査及び整理作業の際、宮城県教育庁文化財保護課より多大なご教示をいただいた。記して感謝したい。

## II 遺跡の位置と環境

蒲沢山遺跡は、宮城郡宮城町芋沢字蒲沢山に所在し、国鉄仙山線愛子駅から北へ2.5kmの地点、みやぎ台ニュータウンに通じる町道（赤坂・明神線）の西側に位置している。

宮城県中央部には、西側の奥羽山脈から派生した丘陵地が発達している。この丘陵地は陸前丘陵とよばれ、北から七北田川、広瀬川、名取川の3河川が東流し、それぞれ中流域に河岸段丘を形成している。これら3河川によって開析をうけた丘陵地には、それぞれに名称がつけられており、広瀬川をはさんで大きく2つに分けられている。七北田川-広瀬川間の丘陵地は、七北田丘陵（七北田川右岸）と国見丘陵（広瀬川左岸、国見・大石原一帯）とよばれ、広瀬川-名取川間の丘陵地は、青葉山丘陵と蕃山丘陵（青葉山丘陵の西方、西風蕃山、折立、茂庭）とよばれている。

宮城町はこの2大丘陵の間にひろがる愛子盆地に位置している。盆地のほぼ中央を広瀬川が



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	蒲沢山遺跡	縄文(早・前)	15	蛇台原B遺跡	文安
2	赤坂遺跡	文	16	遠	奈良
3	高野原遺跡	文	17	遠	平安
4	原館遺跡	世	18	種田遺跡	奈良
5	正安・嘉元の碑	世	19	上町A遺跡	平安
6	馬場城跡	近世	20	上町B遺跡	奈良
7	中世城跡	世	21	補陀寺遺跡	奈良
8	花坂遺跡	近文	22	觀音館遺跡	近世
9	本郷遺跡	文	23	海塚遺跡	世
10	雷神B遺跡	世	24	想二本松A遺跡	奈良
11	堀内遺跡	文	25	本林C遺跡	平安
12	御殿殿	平	26	柳林B遺跡	奈良
13	御殿殿	文	27	弥勒寺の元草の碑	良
14	御殿殿	中			平安

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

東流している。広瀬川には、熊ヶ根付近で大倉川、落合付近で茅沢川が合流し、それに河岸段丘を形成している。蒲沢山遺跡は、七北田・国見丘陵の西南端を流れる茅沢川の支流・赤坂川沿に位置している。遺跡の所在する丘陵は、東から入り込んだ谷によって分けられており、今回調査したのは南側の丘陵である。頂部の標高は230mほどで、赤坂川からの比高差は40~50mほどである。現状は山林となっている。

宮町の遺跡数は、現在包含地88、城館17、神社、番所跡、廃寺、板碑、塚など計132遺跡が確認されている。特に、縄文時代の遺跡は広瀬川・茅沢川と、これらの支流沿いに発達した段丘上や丘陵上に数多く立地している。蒲沢山遺跡の立地する広瀬川左岸には、高野原遺跡、赤坂遺跡、中原遺跡、花坂遺跡といった縄文の遺跡が知られている。

### III 調査の方法および経過

今回の調査は区画整理事業計画区域内の赤坂川左岸丘陵全域を対象とした。

#### (1) 調査地区の設定

本遺跡が存在する丘陵は開発計画区域内に面積約70,000m<sup>2</sup>に達する平坦面を有し、ほぼ東西方向に長軸をもつ。

そこで東西方向と南北方向を軸線として、対象地区全体に50m単位で大グリッドを組み、さらにその中を2m単位で小グリッドを組んだ。

大グリッド名は南北軸を南から算用数字で、東西軸を東から大文字のアルファベットで表示し、小グリッド名は南北軸を算用数字で、東西軸を小文字のアルファベットで同様に表示した(例・K 8-1a)。

また調査地区を便宜上3地区に分け、丘陵中央の全面剝離地区の西側を西区、全面剝離地区を中央区、その東側を東区とした。

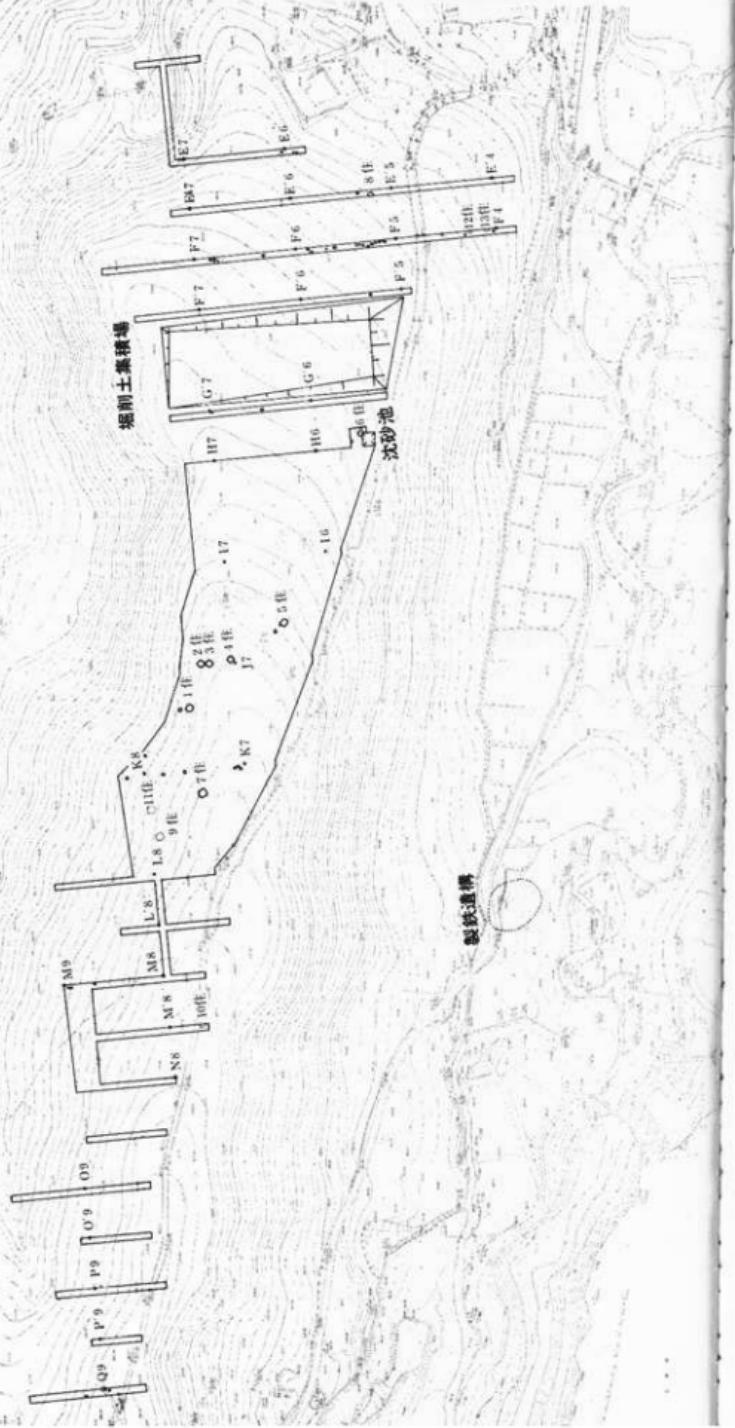
西区は面積約15,000m<sup>2</sup>の平坦面を有する。この地区は南北方向の幅3mのトレンチを25m間隔で10ヶ所設定した。さらに丘陵頂部に東西方向の幅3m、長さ50mのトレンチを1ヶ所設定した。又西区の丘陵北側下端で弥生時代の土器片を表探することができた地点は面積約600m<sup>2</sup>を全面剝離した。この地区を以後弥生土器表探地区とよぶ。西区の発掘面積は2,200m<sup>2</sup>である。

中央区は面積約20,000m<sup>2</sup>の平坦面を有し、全面剝離した。発掘面積は13,000m<sup>2</sup>である。

東区は面積約30,000m<sup>2</sup>の平坦面を有し、西区と同様に南北方向の幅3mのトレンチを25m間隔で6ヶ所、丘陵裾部に50m間隔で1ヶ所、さらに東西方向の幅3mのトレンチを設定した。発掘面積は2,600m<sup>2</sup>である。

調査対象面積は、総計約70,000m<sup>2</sup>、発掘面積は17,800m<sup>2</sup>である。

第2図 造跡地形図および調査区域



## (2) 調査の方法

伐採伐根作業は、区画整理事業工程の一環として実施された。

調査の方法は重機により、表土を剥離し、人力による遺物及び遺構の検出作業を行い、遺構の形状、遺物の出土状況等を記録した。遺物の取上げ方法は、石器及び土器については出土地点を記録し、その他の剝片類については小グリッドごとに一括して取り上げた。

## (3) 調査の経過

調査の前段の伐採伐根作業は7月15日から8月13日まで約4週間を要した。

発掘調査は8月19日から開始し、10月31日に終了し、約2ヶ月半を要した。以下調査経過を列記する。

- |              |                          |
|--------------|--------------------------|
| 8月19日～9月13日  | (表土剥離及び遺構確認作業)           |
| 9月10日～9月29日  | (グリッド設定作業)               |
| 9月25日～10月22日 | (遺物取上作業及び写真撮影、出土地点の記録)   |
| 10月3日～10月15日 | (遺構検出作業及び写真撮影、形状等の記録)    |
| 10月21・22日    | (遺構埋戻し作業)                |
| 10月24～10月26日 | (ローム層を掘り下げ、写真撮影及び地層図の作成) |
| 10月27～10月31日 | (機材撤収等)                  |

この調査の結果、西区、中央区、東区いずれの地区においても、住居址、土壤、ビット等の多くの遺構や遺物が検出された。西区の弥生土器表採地区においては遺構は検出されなかった。又赤坂川左岸において鉄滓を表採することができた。これらの遺構、遺物等の内容については後述する。

# VI 調 査 成 果

## 1 基 本 層 位

調査区の基本層位は4層確認された。第Ⅰ層は表土層である。第Ⅱ層は黒褐色土層である。第Ⅲ層はローム漸移層となり、第Ⅳ層が地山面（ローム層）である。各層の分布をみると、Ⅰ層は10～25cmの厚さで全域にみられるが、Ⅱ層は西にいくほど薄くなり、H区付近で消えてしまう。Ⅲ層は10～30cmの厚さで全域にみられる。遺構と遺物のほとんどは、Ⅳ層地山面で発見されている。

## 2 発見された遺構と遺物

### (1) 遺構とその出土遺物

#### ① 住居址

中央区南側緩斜面を中心として、1号址～13号址まで確認されており、8号址をのぞいてはいずれも地山面で検出されている。1号址～7号址をのぞいては、プランの一部が調査区外にかかるなどしてはっきりしなかった。

#### — 1号住居址 —

(平面形) J7-12j～13j区、J7-12k～14k区にかかる地山面で検出された。370×330cmの規模を有し、不整方形のプランを呈する。

(出土遺物) 第3図10, 13, 17

土器片は、縄文の施文された胴部片を中心として8点出土している。口縁部上端に刻目をもち、R型の燃り糸の押圧と沈線による区画が施されたもの(10)や、R型の燃り糸が施文されたものの(13)がある。石器類は剝片のみで、使用痕のみとめられる剝片が2点出土している。(17)

#### — 2号住居址 —

(平面形) J7-8a～10a区、I7-8y～10y区にかかる地山面で検出された。380×330cmの規模を有し、不整方形のプランを呈する。プラン南側で3号址と重複する可能性もある。

(出土遺物) 第3図12, 15, 18, 20

土器片は、縄文の施文された胴部片を中心として9点出土している。胎土に纖維を含み、L型の縄文が施文されたもの(12)や、纖維を含まないもの(15)がある。石器類は、基部を欠いた石鏃(20)と、先端部を欠く石槍(18)が出土している。

#### — 3号住居址 —

(平面形) J7-7a・8a区、I6-7y・8y区にかかる地山面で検出された。370×340cmの規模を有し、不整方形のプランを呈する。プラン北側で2号址と重複する可能性もある。

(出土遺物) 第3図19

土器片は出土していないが、使用痕のみとめられる剝片が3点出土している。

#### — 4号住居址 —

(平面形) J7-2a区、I7-1y・2y区、I7-2x区にかかる地山面で検出された。330×280cmの規模を有し、不整方形のプランを呈する。

(出土遺物) 第3図14, 21

土器片は、縄文の施文された胴部片(14)のほか、無文土器が2点出土している。石器類は剝片のみで、使用痕のみとめられる剝片(21)がある。

#### — 5号住居址 —

(平面形) I6-12r・13r区、I6-12q・13q区、I6-12p区にかかる地山面で検出された。340

×340cmの規模を有し、偶丸方形のプランを呈する。プラン北側に100×110cmの規模をもつ土壙を伴っている。

(出土遺物) 第3図1～3, 6, 8, 11

土器片は、いわゆる羽状繩文系土器を中心として25点出土している。口唇部に棒状工具による刻目をもち、地文に繩文が施文されるもの(1～3)や、胎土に纖維を含み、節の太い原体(6mm)で羽状繩文がつけられたもの(6)がある。石器類は剝片のみである。

#### — 6号住居址 —

(平面形) H5区内に沈砂池を掘削中に焼土を検出したもので、南側部分を程を欠いている。推定350×270cmの規模を有し、長方のプランを呈していたとおもわれる。

(出土遺物) 第3図9・22・23

土器片は、繩文の施文された胴部片を中心として29点出土している。(9)はR型の撫り糸を施文したものである。石器類は、石鎌(23)と、使用痕のみとめられる剝片(22)が出土している。

#### — 7号住居址 —

(平面形) K7-10f～12f区、K7-10g～12g区、K7-11h区にかかる地山面で検出されたもので、440×360cmの規模を有し、不整方形のプランを呈する。プラン北側に40×50cmの範囲で焼土を伴っている。

(出土遺物) 第3図4, 5, 7, 24

土器片は、繩文の施文された胴部片を中心として24点出土している。口唇部に原体による刻目をいれ、同じ原体による地文をもつもの(4)や、羽状繩文を地文にもち、口縁部上端に刻目をもつもの(5)がある。石器類は剝片のみであるが、頁岩の大型のフレイク(24)が出土している。

#### — 8号住居址 —

E'トレチにおいて、プラン東側部分をⅢ層上面で検出したもので、推定320×320cmの規模を有し、隅丸方形のプランを呈するとおもわれる。

#### — 9号住居址 —

ローム層のグリッド調査中、焼土を伴う落ち込みを検出したもので、K7-25n区25o区、K7-24n, 24o区にかかっている。平面プランは未確認である。

#### — 10号住居址 —

M'トレチ南側、地山面で集石に伴って一括個体(第7図45, 46)が出土したもので、平面プランは未確認である。

#### — 11号住居址 —

ローム層のグリッド調査中検出したもので、K7-25j・25k区にかかっている。羽状縄文土器・石匙・スクレイバー等の剥片石器が集中出土している。平面プランは未確認である。

#### — 12号・13号住居址 —

Fトレンチ南側斜面に検出された。羽状縄文土器を出土している。平面プランは未確認である。

#### ② 土壙およびピット

土壙およびピットは総数70基検出されたが、確認面において調査を終了したため、掘り込み等の構築状態は不明である。土壙とピットの区分については、平面形と規模の面から、100×100cmを超えるものについては土壙とし、それ以下のものをピットとして分類している。

##### (ピット)

ピットは総計36基検出され、そのうち30基が、調査地区南東部にあたる丘陵上で最も広い面をもつ部分(E・F・G区)に集中している。検出されたピットをみると、その径が30~50cmとなるものが17基、30cm台が13基と、全体の80%がこの中に含まれている。また平面プランでは、円形を呈するものが24基と全体の70%を占めている。

##### (土壙)

土壙は総計34基検出されているが、ほぼ調査区全域にわたっている。規模別でみると、長軸で100~120cmを有するものが13基、121~140cmが6基、141cm以上が6基となっている。また平面形では、円形となるもの6基、長楕円となるもの5基、不整形となるものが5基となっている。主軸方位が地形の傾斜方向に一致するものが、一致しないものの2倍強となっており、土壙の機能を考えるうえでの参考になるとおもわれる。

土壙およびピットの機能については、現時点においては不明であるが、構築された時期については、確認面における遺物の出土状況からみて、縄文早期末~前期初頭になるとおもわれる。

また、図面にはとりあげなかったものの、素掘りの炭焼跡を調査区全域に多数検出した。ほとんどがⅡ層中から掘りこまれており、直径150~200cmの規模を有し、-20~30cmのレンズ状の掘り込みをもっていた。覆土にはカーボンを大量に含み、しまりがなく、焼土は伴っていない。

#### ③ 製鉄遺構

赤坂川左岸を表探査調査中発見したもので、川岸の傾斜地(約1,000m<sup>2</sup>)に直径30mにわたって鉄滓が分布している。確認された遺構は、水路跡だけであり、遺構の主体部は不明である。今回発見された鉄滓が、精錬滓か、鍛冶滓なのかは、今後の分析による所見をまたなければならないが、この鉄滓のほかに遺構の性格や、使用されていた時期を示すような遺物は出土していない。しかし「安永風土記」にもその記録がみあたらないことから、近世以前に使用されていたものとおもわれるが、当地における製鉄の歴史を考えるうえで貴重な遺構と考えられる。

	地区・層位	部位・形態	文様表現技法	地文	胎土・色調	備考
1	5住 P11	口縁 深鉢	口縁部上端に棒状工具による刻目	縄文	織維混入・暗黃褐色	裏面に横ナメ調整
2	5住 P3	口縁 深鉢	口縁部に棒状工具による刻目	不明	織維混入・暗黃褐色	裏面に横ナメ調整
3	5住 P7	口縁 深鉢	口縁部に棒状工具による刻目	縄文 LR	黄褐色	No.6と同一個体
4	7住 (K7-10)	口縁 深鉢	口縁部にRL原体による刻目	縄文 RL	織維混入・暗黃褐色	
5	7住 (K7-11)	口縁 深鉢	口縁部上端に棒状工具による刻目	縄文 RL	織維混入・暗黃褐色	
6	5住 P7	胴部 深鉢		縄文 LR	暗黃褐色	No.3と同一個体
7	7住 P4	胴部 深鉢		羽状織文 LR, RL	暗褐色	擦り異なる2本の原体使用
8	5住 P8	胴部 深鉢		羽状織文	織維混入・暗黃褐色	節の太い(6mm)原体使用
9	6住	胴部 深鉢		擦り糸文 RE	黄褐色	
10	1住 P2	口縁 深鉢	口縁部上端に刻目、擦り糸の押圧	擦り糸 RE	織維混入・暗黃褐色	
11	5住 P4	胴部 深鉢		縄文 RL	織維混入・黄褐色	
12	2住 P3	胴部 深鉢		縄文 RL	織維混入・暗褐色	
13	1住 P3	胴部 深鉢		擦り糸文 RE	暗黃褐色	
14	4住 P1	胴部 深鉢		縄文	織維混入・赤褐色	
15	2住 P4	胴部 深鉢		縄文 LR	小砂粒を多量に含む 黄褐色	
16	1住 P5	胴部 深鉢		縄文 RL	織維混入・暗黃褐色	

土器観察表

	形態	地区・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考
17	フレイク	1住	25.5	30.5	7.0	5.0	頁岩	使用痕
18	石槍	2住	27.5	24.5	5.5	2.5	珪化凝灰岩	欠損
19	フレイク	3住	36.0	12.0	4.5	2.5	頁岩	使用痕
20	石鏃	2住	14.5	12.0	2.5	0.25	頁岩	欠損
21	フレイク	4住	31.5	35.0	4.5	5.0	頁岩	使用痕
22	フレイク	6住	50.5	35.0	13.0	22.5	頁岩	使用痕
23	石鏃	6住	19.5	14.5	4.5	0.5	頁岩	
24	フレイク	7住	122.0	107.0	47.5	490.0	頁岩	

遺構出土遺物計測表

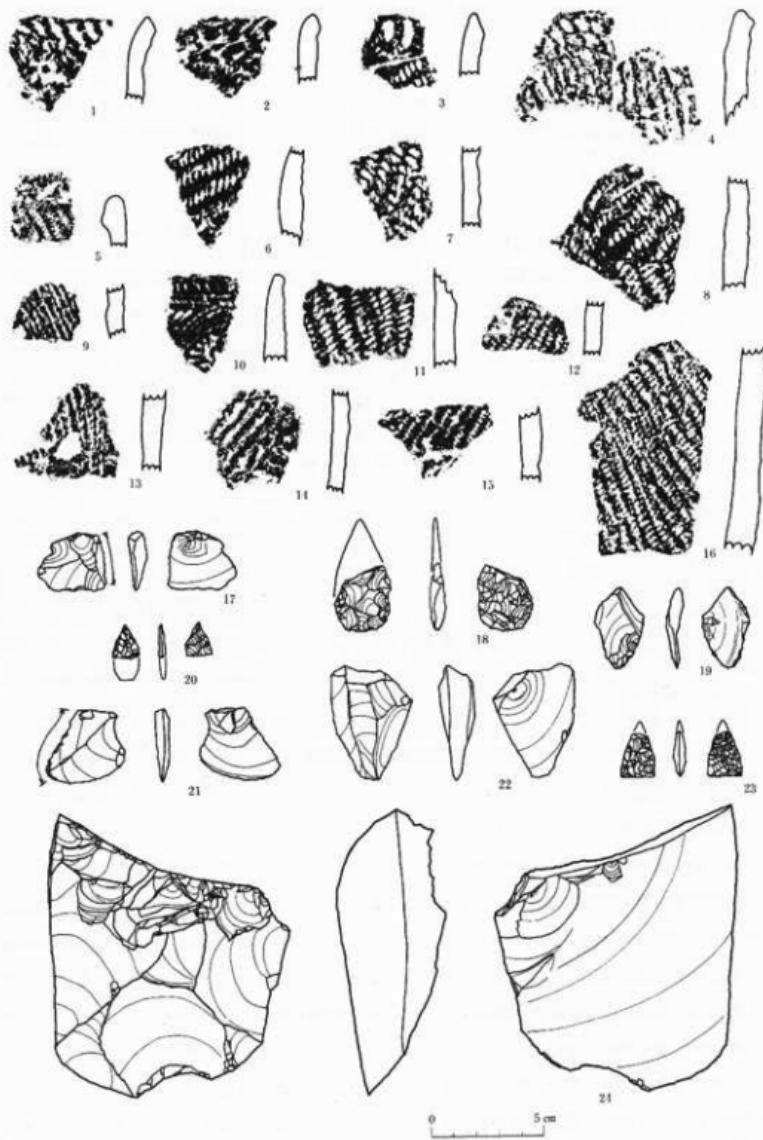
## (2) 出土遺物

## ① 縄文土器 第4図1~第7図48

縄文土器は最も出土量が多く、総数670点が出土している。胴部資料が542点と多く、口縁部が85点、口頭部が12点、底部資料が15点となっている。これらの土器について、胎土、内外面の文様および文様要素について観察を行なった結果、第I類~第XII類に大別された。さらに各土器群は、文様の施文部位・文様構成などによって細別された。

## 第I類(第4図1~4)

いわゆる条痕文系土器で、胎土に織維を含み(3)土器の内外面に貝殻条痕文をもつ。胴部資料のため、全体の文様構成は不明である。1, 2は内外面に条痕文をもつもので、3は外面のみ条痕文をもっている。4は表裏ともにRLの縄文が施文されているものである。



第3図 住居址出土遺物

## 第Ⅱ類（第4図5～14、第5図16～25）

いわゆる羽状縄文系土器群とよばれるもので、胎土に纖維を含んでいるものが大半を占める。今回の調査の出土遺物のほとんどがこの中に含まれる。文様要素および施文技法によって、a～d類に細別される。a) 口唇部～口縁部上端に文様、b) 羽状縄文、c) 斜縄文、d) 摺り糸文。

### Ⅱ a類（第4図5、6、8、9）

口唇部や口縁部上端に文様をもつもので、羽状縄文や摺り糸文（5）を地文としている。ヘラ状工具により、押圧されたもの（5）、刻目が施されたもの（6、8、9）がある。

### Ⅱ b類（第4図7、12～14、第5図16～20）

胴部資料のみのため、全体の文様構成は不明であるが、羽状縄文が施文されたものである。同一原体によって施文されたもの（13）、2種類の摺りの異なる原体によって施文されたもの（19）、条の短い原体によって施文されたもの（17）があり、羽状縄文が施文されたのちに、横位の縄文が押圧されているものもある。（14）

### Ⅱ c類（第5図21～25）

胎土に纖維を含むもの（21、24、25）、含まないものの（22、23）とがあり、縄文が施文されている。

### Ⅱ d類（第4図10、11）

胎土に纖維を含むもので、いずれもR&#65376;の摺り糸文が施文されている。

## 第Ⅲ類（第5図15）

細い粘土紐の貼りつけにより区画され、隆帯の両側にR&#65376;の摺り糸が押圧されているもので、1号住居址より出土した土器（第3図10）に類似する文様構成をもっている。

## 第Ⅳ類（第5図26）

ヘラ状工具による波形状の沈線が施文されているもので、1点しか出土していない。

## 第Ⅴ類（第5図28、第6図29、34）

竹管状工具によって、文様が構成されているものである。平行沈線の間に半竹状工具によつてC字状の刺突が施されたもの（28）、口縁部に竹管状工具による刺突が縱位に施されたもの（29）、平行沈線が連弧状に施されたもの（34）がある。

## 第Ⅵ類（第5図27、第6図30～33）

文様要素および施文技法によって、a、b類に細別される。a) 沈線+細い粘土紐。b) 沈線+隆帶上に刻目。

### Ⅵ a類（30、31）

平行する沈線の間に、細い粘土紐による波形状の貼りつけをもつものである。

VII b 類 (27, 32, 33)

沈線によって区画され隆帯化した部分に、刻目がつけられているものである。

第Ⅷ類 (第6図35)

口唇部を外反させ、口頭部にヘラ状工具によって沈線をめぐらせ、刻目を入れているもので、1点しか出土していない。

第Ⅸ類 (第6図37)

口縁部資料であり、沈線と粘土紐の貼りつけによって方形の区画を作り、沈線によって隆帯化した部分にC字状の刺突が施されている。

第Ⅹ類 (第6図38, 39, 第7図48)

渦巻状隆帯や把手、小突起をもつものであり、39は梢円形の口縁をもつ浅鉢となる。

第Ⅺ類 (第7図40)

調整によって作りだされた隆帯によって、渦巻状に区画されている。隆帯の両側にRℓの撚り巻が押圧されている。

第Ⅻ類 (第7図41~43)

いずれも口縁部資料であり、文様要素および施文技法によって、a, b類に細別される

XI a 類 (第7図41, 43)

口唇部を肥厚させるか(41)、外側にかえし(43)、口縁部に繩文を押圧しているもの。

XI b 類 (第7図42)

平縁な口縁に、棒状工具による渦巻状の沈線をもつもの。

第Ⅼ類 (第7図45, 46)

同一個体であり、調整によって作りだされた隆帯が胴部に一条めぐらしている。地文はRℓの撚り糸文であり、綾絡文が垂下している。

② 弥生土器 (第7図49~52)

胴部の小破片を中心として出土しており、繩文が施文されている。49は「く」の字状の口頭部をもち、胴部に繩文が施文されたものである。52は沈線によって区画された横位の繩文帯をもつものである。

(考察)

第Ⅰ類~第Ⅹ類とした土器群は、繩文時代早期末~前期初頭にかけてのものとされている。

I類は条痕文をもつ土器であり、小牛田町素山貝塚出土の土器を標準とする土器で、早期末の素山2式とされている。

II類とした羽状繩文をもつ土器のうち、口唇部や口縁部上端に文様をもつII a類は、船入島下層式に、またII d類の撚り糸が施文された土器は、それに伴出するとされている土器である

(林1965)。

II b類, II c類とした土器群は、上川名II式～大木1式にみられるものであるが、特定することはできなかった。

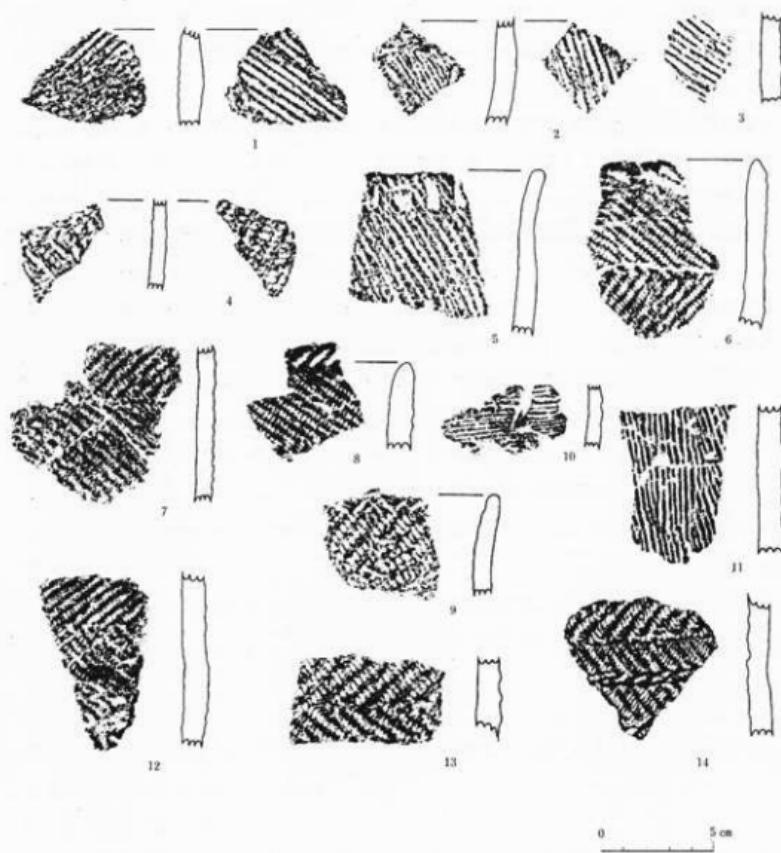
II b類とした第4図14, III類とした土器群は上川名II式になるとおもわれる。

第IV類～第VI類とした土器群は、縄文時代前期とされているもので、IV類は大木2式に、V類は大木3式に、VI類は大木5a式にそれぞれ比定される。

第VII類～X類として土器群は、縄文時代中期とされているもので、VII類、VIII類としたものは大木7a式に、IX類～XI類とした土器群は大木8a式にそれぞれ比定される。X類とした土器は、仙台市六反田遺跡において、大木10式～後期南境式の早い時期とされた土器群の中に、同様の土器がみられる。

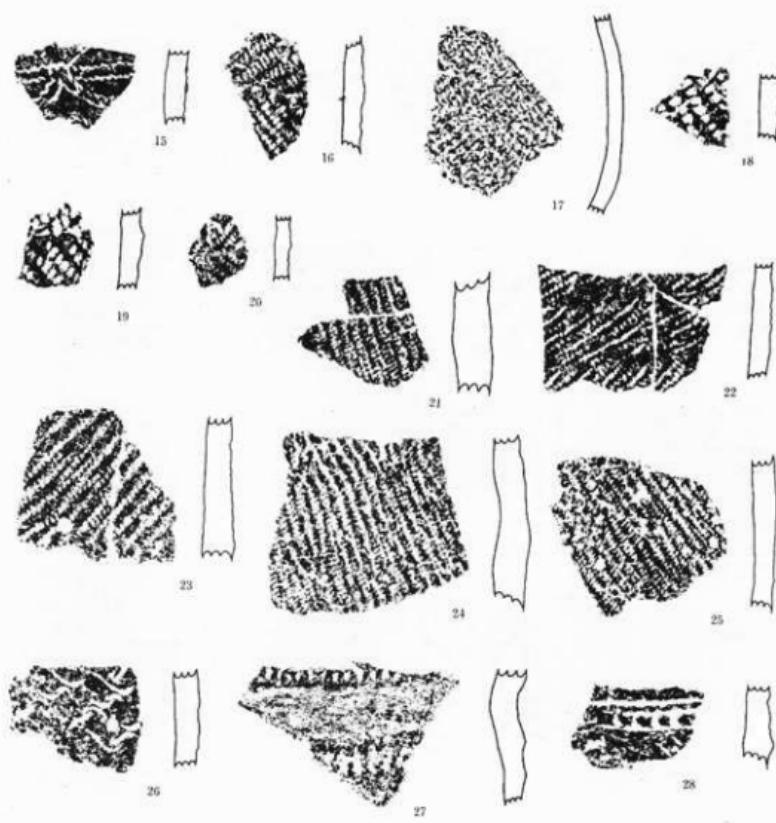
弥生土器は、文様構成や器形等が不明であるところから、どの時期にあたるものかは特定することができなかつた。

また造構に伴って出土した遺物(第3図)は、第II類・第III類土器群と共通の特徴をもつことから、早期木葉～前期初頭にかけてのものとされよう。



地区・層位	部類・形態	文様表現法	地文	胎土・色調	備考
1 K 7	輪鉢 深鉢		乳頭文	砂粒を多量に含有・暗褐色	
2 1.6-10 w	輪鉢 深鉢		乳頭文	小砂粒を多量に含有・黃褐色	
3 J 7-8 s	輪鉢 深鉢		乳頭文	鐵錆斑入・黃褐色	
4 J 7-11 y	輪鉢 深鉢	轍縞文	R.L.	鐵錆斑入・黃褐色	
5 J 7-13 y	口縁 深鉢	口縁部上端にヘラ状工具による跡目	擦り痕文 R.P.	鐵錆斑入・黃褐色	
6 J 7-10 j	口縁 深鉢	口縁部に棒状工具による跡目	刮拭縞文	砂粒を多量に含有・暗褐色	
7 K 7-7 e	網鉢 深鉢		網状縞文	明黄褐色	
8 J 7-10 j	口縁 深鉢	口縁部上端に棒状工具による跡目	擦文 R.L.	小砂粒を多量に含有・明黄褐色	
9 J 7-8 s	口縁 深鉢	口縁部にヘラ状工具による跡目	擦文 R.H.	鐵錆斑入・暗褐色	表面に橘子皮調
10 ポトレンチ	網鉢 深鉢		擦り痕文 R.P.	鐵錆斑入・暗褐色	
11 ポトレンチ	網鉢 深鉢		擦り痕文 R.P.	鐵錆斑入・暗褐色	
12 J 7-10 j	網鉢 深鉢		刮拭縞文	小砂粒を多量に含有・暗褐色	
13 J 7-5 f	網鉢 深鉢		有底縞文	小砂粒を多量に含有・暗褐色	
14 ポトレンチ	網鉢 深鉢	刮拭縞文後、擦文を横柱に押す	鐵錆斑入・暗褐色		

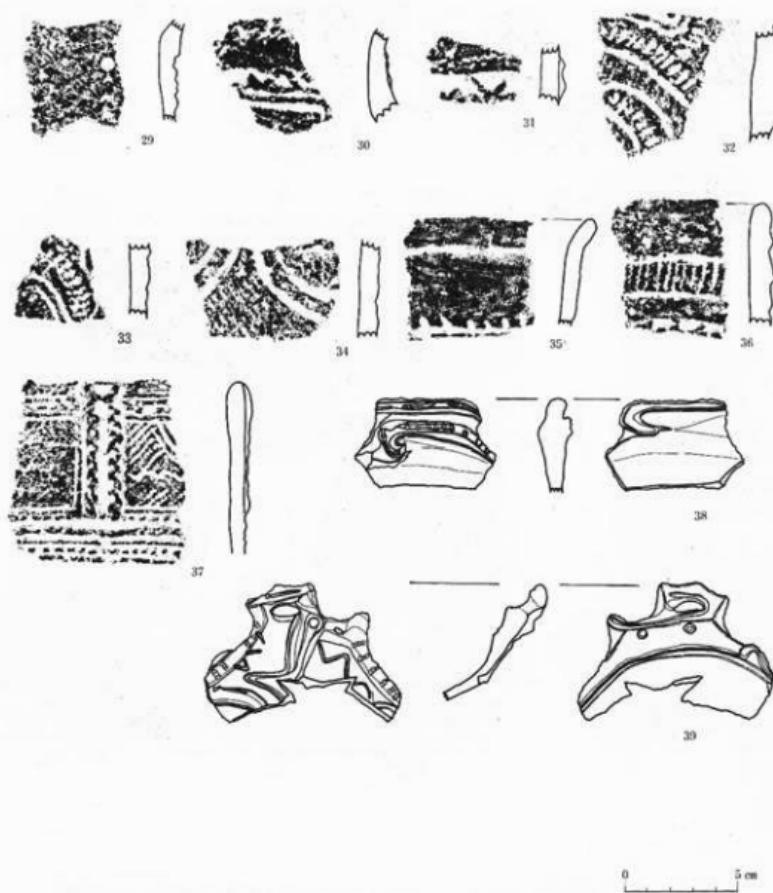
第4図 出土遺物 土器(1)



0 3 cm

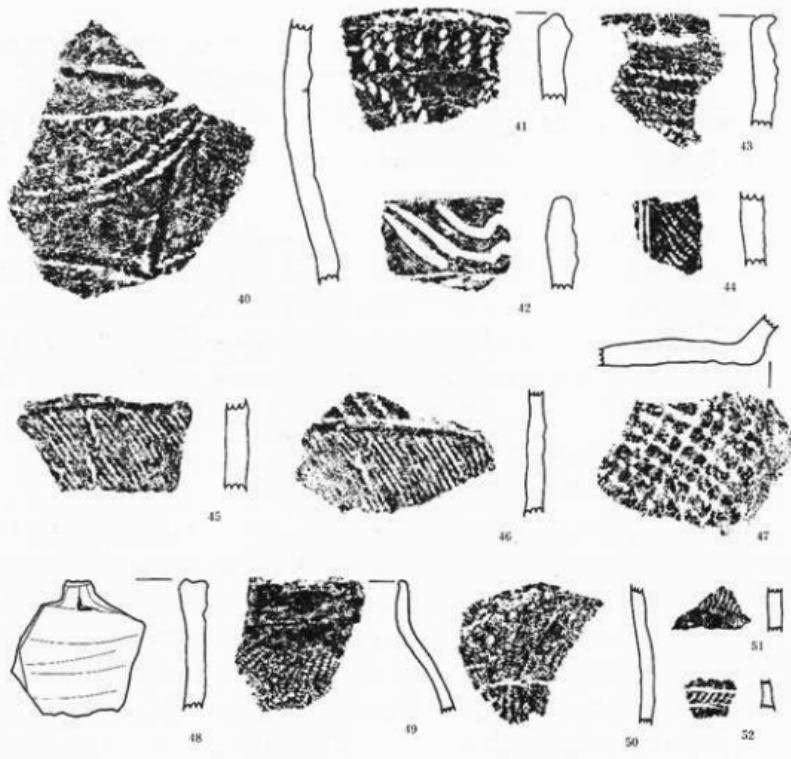
地区・層位	断面・形態	文様表裏注記	地文	加土	色調	備考
15 K.7-5 d	口部深鉢	粘土縫による区画と凹りあわの押出			黄褐色	
16 K.7-6 z	側・底深鉢		羽状織文	織痕混入・黄褐色		
17 K.7-14 z	側・底深鉢		羽状織文	砂粒を多量に含む・赤褐色	3~4cmの条の短い厚体	
18 K.7-10 f	側・底深鉢		羽状織文	織痕混入・暗褐色		
19 K.7-9 f	側・底深鉢		羽状織文	織痕混入・黄褐色		
20 K.7	側・底深鉢		羽状織文		黒褐色	
21 K.7-1.7	側・底深鉢		斜織文 R.L.	織痕混入		
22 K.7-1.7	側・底深鉢		斜織文 L.R.			
23 K.6-12 z	側・底深鉢		斜織文 L.R.	砂粒を多量に含む・暗褐色		
24 K.6-12 z	側・底深鉢		斜織文 R.L.	織痕混入・赤褐色		
25 美・屏	側・底深鉢		織文 R.L.	織痕混入・M.G.色		
26 14d	口部深鉢	ヘラ状工具によるツメ形文		砂粒を多量に含む・赤褐色		
27 K.7-6 z	口部深鉢	貼りつけによる隆起上に斜目		砂粒を多量に含む・暗褐色		
28 K.7-13 f	口部深鉢	平行流線の間に平行にC字状剥片		砂粒を多量に含む・灰白色		

第5図 出土遺物 土器2



地名・層位	部 種・解 釋	文 様 表 呈 付 道	地 文	施 上・色 調	編 号
29 14-12 F	口縁部 深鉢	竹葉による小刻突	小砂粒を多量に含有、赤褐色		
30 K.7-10 F	口縁部 深鉢	並行沈縫線と粘土鉢の透状の貼りつけ	小砂粒を多量に含有、赤褐色		
31 素 筒	口近部 深鉢	粘土鉢の透狀の貼りつけ	赤褐色		
32 1.7-4 V	胸 部 深鉢	並行沈縫線による円筒形の凹面と隆溝上に斜目	小砂粒を多量に含有、黄褐色		
33 1.7-5 X	胸 部 深鉢	並行沈縫線による円筒形の凹面と隆溝上に斜目	小砂粒を多量に含有、黄褐色		
34 無 接	胸 部 深鉢	並行沈縫線による透状の凹面			
35 佐佐木塚原地区	口縁部 深鉢	口縁部を厚さ9mm、ハサウエ工による洗削	小砂粒を多量に含有、赤褐色	表面にセーラン付着	
36 K.7-11.0	口縁部 深鉢	並行沈縫線による洗削、神社工による押し石	小砂粒を多量に含有、黄褐色		
37 K.8-2 W	口縁部 深鉢	洗削とそれにより隆溝化した凹面、並行沈縫線による洗削	小砂粒を多量に含有、黄褐色		
38 1.7-15 X	口縁部 深鉢	隆溝による洗削状の跡りつけ	小砂粒を多量に含有、黄褐色		
39 K.8	口縁部(把手) 深鉢	隆溝により凸状の痕、洗削による施え、内部に洗削がめぐら	黄褐色		

第6図 出土遺物 土器③



5 cm

地区・層位	部位・形態	文様・青様・性状	地文	胎生・色調	備考
40 K 7-12 c	側部・深鉢	縦い縞模と圓文押捺による凹凸状の凹溝	無文	砂粒を多量に含む・黄褐色	
41 K 7-25 e	口縁・深鉢	LJ特部を肥厚させ、RJの織文を押捺		小砂粒を多量に含有・赤褐色	
42 K 7-1 i	口縁・深鉢	口縁部を外側にかえし、RJの織文を押捺		小砂粒を多量に含有・	
43 部生出土区	口縁・深鉢	口縁部に練成工具による直脊状の洗痕		小砂粒を多量に含有・灰白色	
44 部生出土区	側部・深鉢	平行洗痕による凹溝	織文・L京	小砂粒を多量に含む・黄褐色	
45 M'トレンド	側部・深鉢	縦い縞模による凹溝、圓文押捺下	無り名	小砂粒を多量に含む・赤褐色	M46と同一個体
46 M'トレンド	側部・深鉢	縦い縞模による凹溝、圓文押捺下	無り名	小砂粒を多量に含有・黄褐色	M45と同一個体
47 K 7区	底部・深鉢	格子文		小砂粒を多量に含有・暗黃褐色	
48 K 7-5 b	口縁(小突起)		無文		
49 部生出土区	口縁・底	LJ底部に無文帯、網模に圓文		小砂粒を含む・暗黃褐色	
50 部生出土区	側部・底		無文	小砂粒を含む・暗黃褐色	
51 部生出土区	側部		無文	小砂粒を含む・暗黃褐色	
52 部生出土区	側部	圓文		小砂粒を含む・暗黃褐色	

第7図 出土遺物 土器③

### ③ 石 器

#### a. 石鎌 (第8図1~19)

出土した石鎌は35点であり、そのうち完成品は20点である。石材は19をのぞいて、すべて頁岩が用いられている。1~3は直線的な側縁をもち、平坦な尖端をもつ短冊型のものであるが3は基部の側縁に両側から浅い抉りが入れられている。4~9は、尖端部から基部にかけた側縁の変換点が明瞭なもので、平坦な基部をもつものである。10は、傾斜の変換点がゆるやかで、基部の側縁に抉りを入れて凸状の茎をつくりだしているものである。11, 12は、側縁部の基部に近い部分が強くふくらんでいるもので、平坦な基部をもっている。13, 14は、側縁部の中央または基部に近い部分がふくらんでいるもので、基部に深い抉りを入れてU字状の凹みをもつものである。15は、直線的な側縁をもち、基部の側縁に深い抉りを入れて凸状の茎を作りだしているものである。16~19は、側縁部の中央または基部に近い部分がふくらんでいるもので、石鎌としては比較的大型のものである。

#### b. 石槍 (第8図20~25, 第11図55)

出土した石槍は32点で、そのうち完成品は12点である。石材についてはほとんどが頁岩を用いている。20は、直線的な側縁をもち、尖端の形状もゆるやかなふくらみをもっている。21~23は、尖端部から基部にかけた側縁の変換点が明瞭なもので、側縁部の基部に近い部分が強くふくらんでいる。24は、側縁部が強くふくらんでいるもので、裏面は側縁にのみ加工が施されている。25は、尖端部を欠いているものの、いわゆる木葉型になるとおもわれるものである。11図55は、最大長163mmと大型のもので、両面に剥離調整が施されている。

#### c. 石斧 (第9図26~30)

出土した石斧は22点で、そのうち完成品は15点である。石材については、ほとんどが頁岩を用いている。26, 27は、梢円形を基本とする平面形をもつもので、基部から刃部にかけた側縁がゆるやかにふくらんでいる。出土した石斧のほとんどがこの中に含まれる。28~30は、長方形を基本とする平面形をもつものである。これらの石器はいずれも、最大幅のある位置に急斜度の刃部を作りだしており、刃部には幅の狭い細い剥離調整が施されている。また片面には、ほぼ全面に剥離調整が施されるが、反対側の面には側縁部に調整が施されているだけで、平坦に近い。このため断面形はいずれもかまぼこ型を呈している。

#### d. 石匙 (第9図31~36, 第10図37, 38)

出土した石匙は37点で、そのうち完成品は20点である。石材については、ほとんどが頁岩を用いている。石匙はその形態的特徴から、Ⅰ類：横長型(31) Ⅱ類：縦長型(33, 36, 37, 38) Ⅲ類：三角形型(32, 34, 35) に大きく分けられた。出土点数では、Ⅰ類が1点、Ⅱ類が31点、Ⅲ類が5点であり、Ⅱ類の占める割合が多い。これらの石器はいずれも、両側刃から抉りを入

れて作りだされたつまみをもち、片面にはほぼ全面に剥離調整が施されているが、反対側の面には側縁部にかけて調整が施されているだけで、断面形は三角形状を呈するものが多い。32は、一度刃部を欠損したものを再調整して使用されたとおもわれる。

e. スクレイパー（第10図39～41）

剥片の側辺や末端に、細かな剥離調整を施してつくられた刃部をもつものをスクレイパーとした。出土したスクレイパーは25点である。39、40は、側縁に片面加工によって刃部をつくりだしている。41は、剥離調整による刃部はもっていないが、側縁部にかけて使用痕がみとめられるものである。

f. 石鎌（第10図42）

偏平な石の両端に、挟りを入れたもので、1点しか出土していない。

g. 凹石（第10図43～45）

出土した凹石は3点で、他に磨石が20点出土している。平面形には、楕円形を基本とするもの（43、44）と、棒状になるもの（45）がある。3点とも両面に凹部をもっているが、45のように、両面とともに縦一列で、5～6個の凹部をもつものがある。

h. 石核（第10図46）

加撃面は2ヶ所認められ、大きく自然面をとり去り、加撃面を作りだしている。

i. 打製石斧（第11図47～50、52～54）

出土した打製石斧は16点であり、そのうち完形品は10点である。47～49のような小型のものと、50、52～54のような大型のものとにわけられるが、いずれも素材に粗い剥離調整を施して成形している。54は、刃部が基部よりも僅かに幅が広くつくられているが、全体としては知冊型に近い形態で、刃部は刃縁が丸くつくられている円刃である。52は、肉厚の素材を用いており、断面形はレンズ状を呈している。

j. 磨製石斧（第11図51）

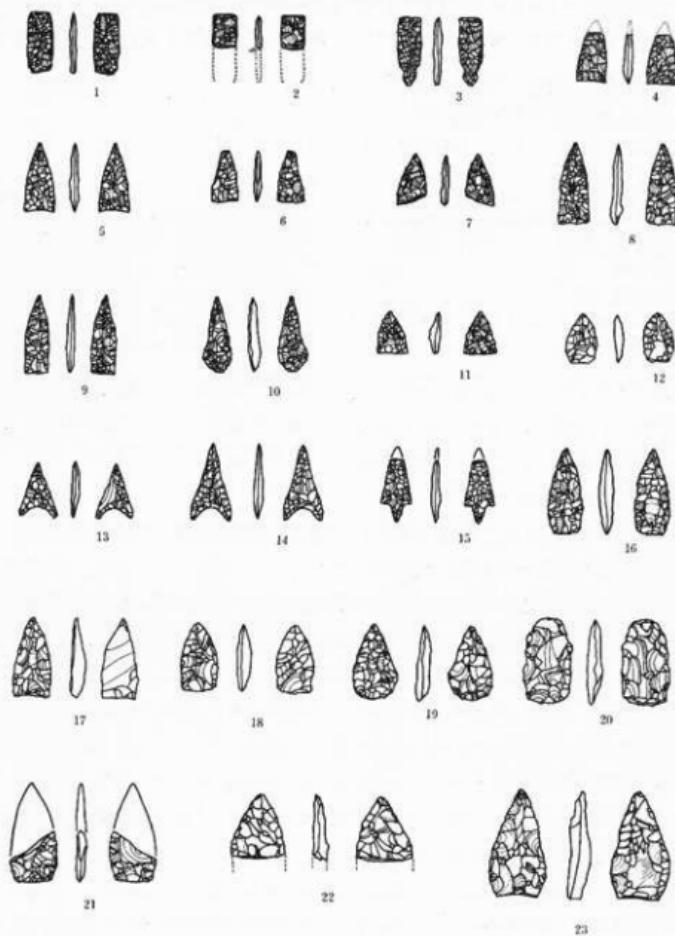
51は刃部を欠いているが、刃部にむかって幅が広くつくられており、断面形は楕円形を呈している。磨製石斧は1点しか出土していない。

k. 石皿（第12図57、58）

出土した石皿は7点である。57は、中央部に大きな皿状の凹みがあり、その中にさらに浅い凹みが4ヶ所みられる。搔きだし口がつけられている。底面が丸みをおびているため、すわりがよくない。58は大型のもので、すわりもよい。皿状の凹みは浅いが、搔きだし口がつけられている。

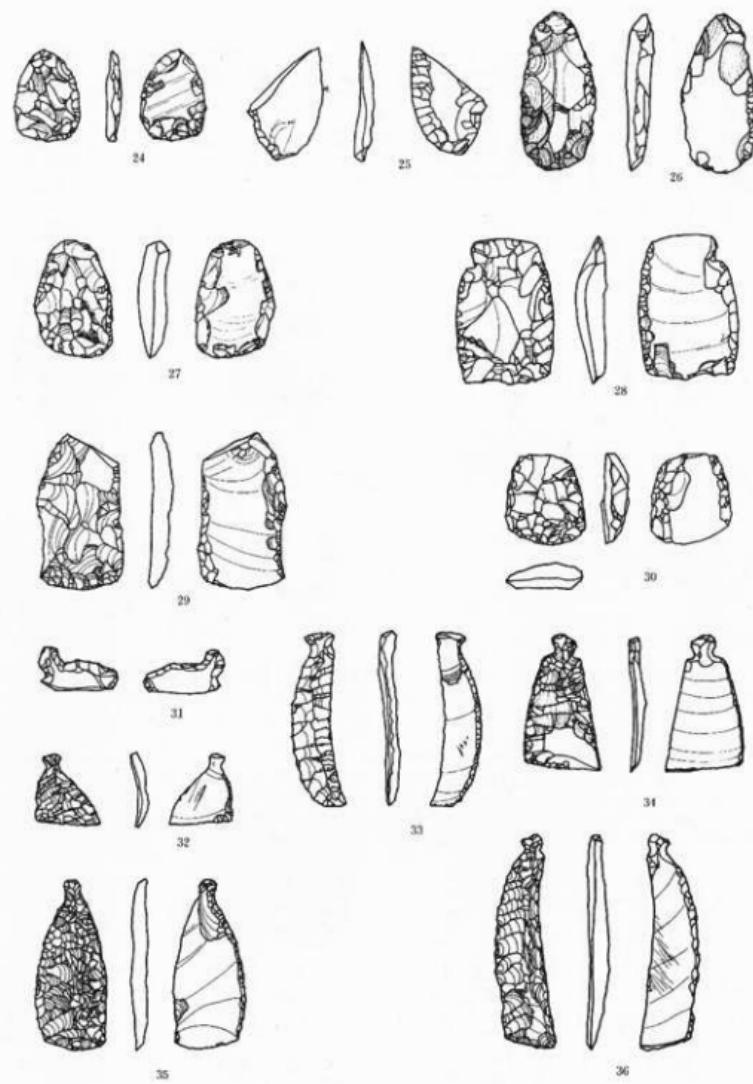
l. 石棒（第12図56）

k 7区Ⅲ層中で出土したもので、長さ56cm、根元の太さ径14cmと大型の石棒で、表面調整のためとおもわれる磨痕が全面にみられ、断面形はふくらんだ三角形状を呈している。



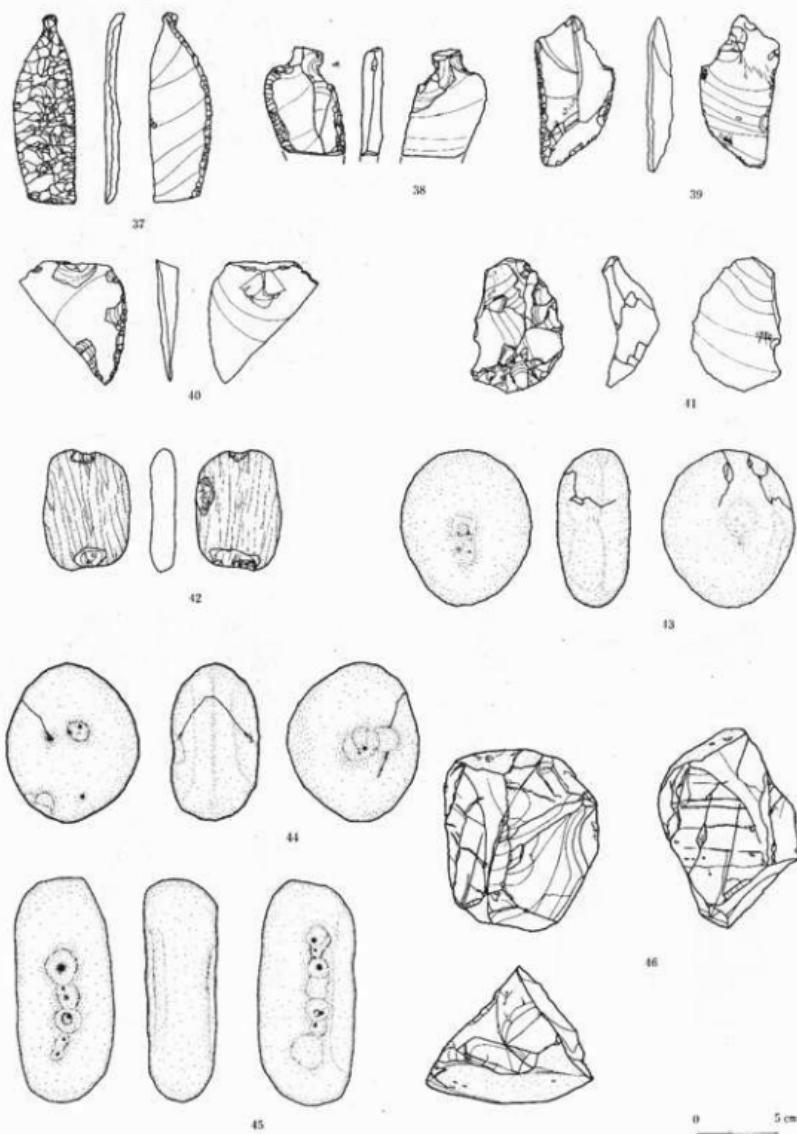
0 5 cm

第8図 出土遺物 石器(1)

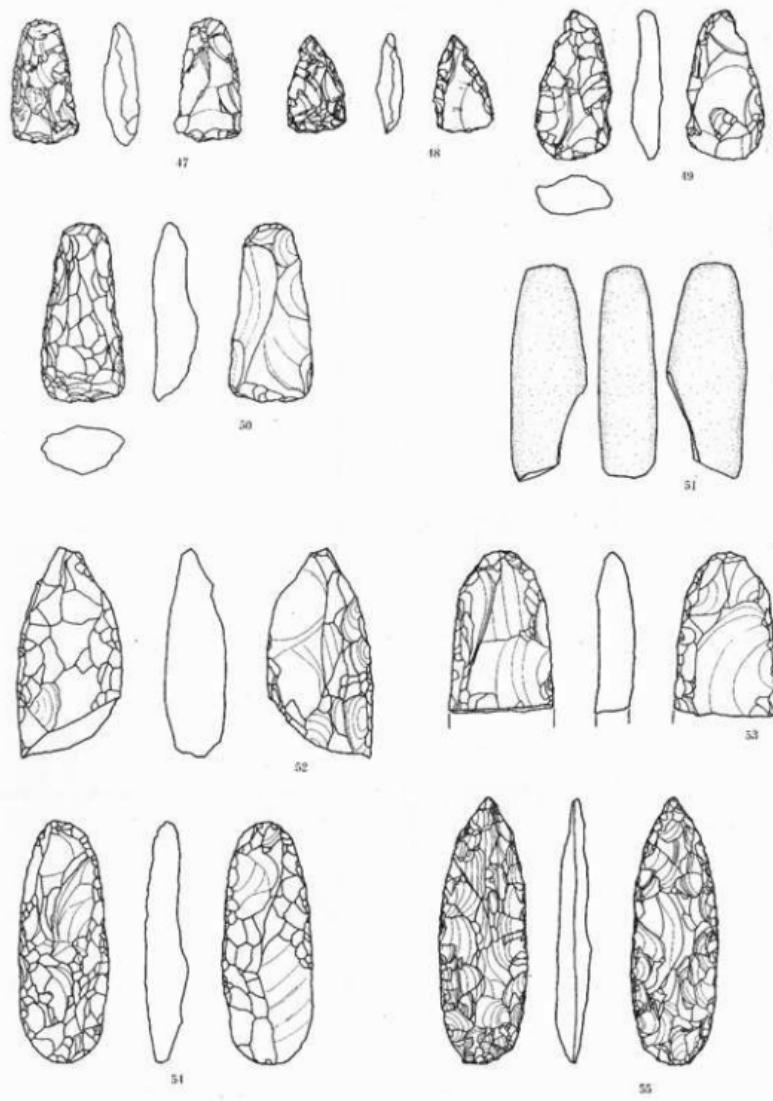


0 5 cm

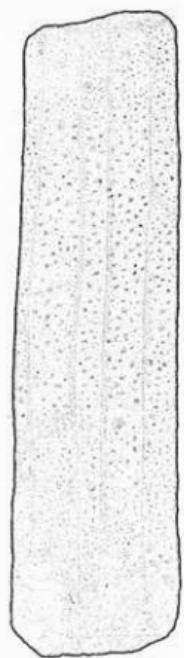
第9図 出土遺物 石器②



第10図 出土遺物 石器③



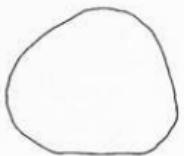
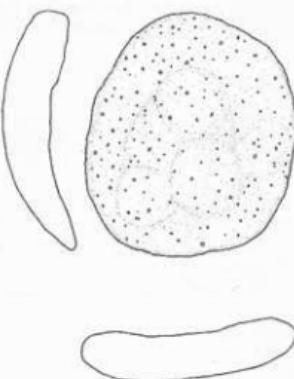
第11図 出土遺物 石器(4)



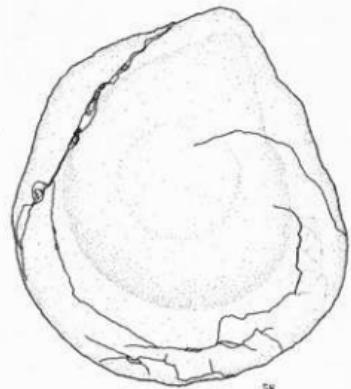
56



57



59



61

0 5 10cm

第12図 出土遺物 石器5

	形 態	地区・層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	備 考
1	石 錐	F'4区表探	26.5	11.0	2.5	0.025	頁岩	欠損
2	*	9区表探	14.5	10.5	2.0	0.025	*	
3	*	K 7-21 d	30.0	10.0	2.0	0.075	*	
4	*	表 探	21.5	13.0	4.0	0.025	*	
5	*	表 探	30.5	13.0	3.0	0.025	*	
6	*	M 9区表探	22.5	12.0	3.0	0.25	*	欠損
7	*	No 2 Grid	23.0	12.0	3.0	0.25	*	
8	*	F 4区	35.0	13.0	5.0	1.0	*	
9	*	J 7区	35.0	10.0	2.5	1.0	*	欠損
10	*	K 7-5 h	33.5	12.0	5.0	1.5	*	
11	*	K 7-2 e	19.0	14.0	4.0	0.5	*	欠損
12	*	J 7	22.0	13.0	3.5	2.5	*	
13	*	J 7-15 i	24.0	16.5	3.0	0.25	*	
14	*	K 7-18 q	34.0	12.0	4.0	0.5	*	
15	*	表 探	27.5	12.5	3.0	0.25	*	
16	*	I 6区	38.0	14.0	6.0	2.5	*	欠損
17	*	I 6-17 y	35.0	11.5	5.0	2.5	*	
18	*	J 7-4 e	30.0	16.0	6.0	1.0	*	
19	*	K 7区	33.0	19.5	5.5	1.0	珪化凝灰岩	
20	石 槍	H 6区	37.0	21.0	6.0	2.5	頁岩	
21	*	E'トレンチ	21.5	21.0	3.5	1.0	*	欠損
22	*	J 7区	27.5	24.0	6.0	2.0	*	
23	*	J 7区	47.0	25.0	8.0	10.0	珪化凝灰岩	
24	*	K 7区	40.0	29.0	6.0	7.5	頁岩	
25	*	K 7区	50.5	32.0	5.0	7.5	*	
26	石 圓	J 7区	69.0	33.5	11.0	27.5	*	欠損
27	*	L 7区	51.5	34.0	12.0	25.0	*	
28	*	No 3 Grid	65.0	43.0	12.0	37.5	*	
29	*	J 7-8 i	68.0	37.0	7.0	26.0	*	
30	*	G 4区表探	39.5	35.0	9.5	16.0	珪化凝灰岩	
31	石 匙	N 9区表探	35.0	19.0	4.5	2.5	頁岩	模型、欠損 再調整
32	*	K 7-19 b	30.0	29.0	5.0	2.0	*	
33	*	I 6-25 x	77.0	16.0	5.0	7.5	*	
34	*	G 5区表探	59.5	35.0	4.5	11.0	*	
35	*	表 探	74.0	31.5	6.5	16.0	*	
36	*	H 5区	95.0	22.0	7.0	17.5	*	欠損
37	*	J 7区	114.0	37.0	7.5	36.0	*	
38	*	K 7-1 e	68.0	43.0	11.0	36.0	*	
39	スクレイバー	K 7-10 q	91.5	48.0	14.5	47.5	*	
40	*	M'トレンチ	74.0	67.0	10.5	45.0	*	
41	*	K 7-12m	82.0	55.0	21.0	97.5	*	欠損
42	石 錐	I 7区	73.0	52.0	14.0	82.5	砂岩	
43	回 石	表 探	95.0	79.0	49.0	600.0	石英安山岩質凝灰岩	
44	*	K 7-21 k	97.0	80.0	52.0	440.0	*	
45	*	K 8-3 i	135.0	58.0	43.0	580.0	石英安山岩	
46	コ ア	H 6区	107.0	96.0	80.0	1000.0	石英安山岩質凝灰岩(珪化)	欠損
47	打 斧	No 7 Grid	75.0	41.0	20.0	67.5	凝灰岩	
48	*	K 7-1 d	58.0	35.0	12.0	22.5	珪化凝灰岩	
49	磨 斧	J 7-11 y	132.0	46.5	36.0	350.0	凝灰質砂岩	
50	打 斧	表 探	91.5	47.5	18.0	80.0	珪化凝灰岩	
51	*	表 探	108.0	50.0	26.0	155.0	凝灰岩質粘板岩	欠損
52	*	H 6区	128.0	64.0	35.0	341.0	凝灰岩	
53	*	劣生土質表探地	98.0	65.0	22.0	212.5	砂岩	
54	*	K 7-4 c	147.0	54.0	25.0	225.0	砂岩	欠損
55	石 槍	H 6区	163.0	54.0	18.0	177.5	頁岩	
56	石 錐	K 7区	560.0	140.0	120.0	14.4kg	砂岩	欠損
57	石 錐	M 9区	200.0	175.0	38.0	2.4kg		
58	石 錐		297.0	266.0	80.0	11.6kg		
59								
60								

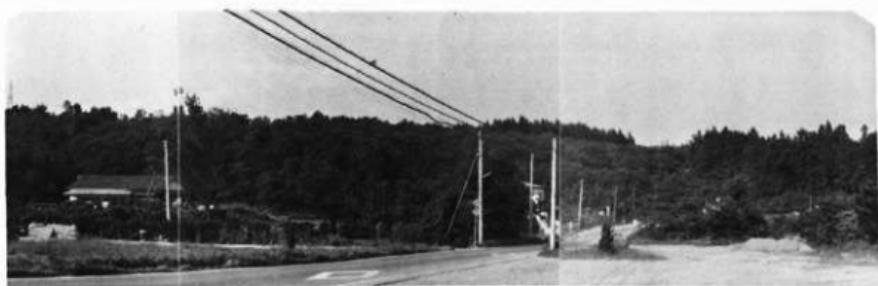
石器計測表

## V ま と め

1. 蒲沢山遺跡は、七北田・国見丘陵南西端、赤坂川左岸に位置している。
2. 発見された遺構としては、堅穴住居址13軒、土壙およびピット70基、赤坂川沿の製鉄遺構がある。
3. 発見された遺物としては、縄文土器、弥生土器・石器がある。縄文土器は早期末葉から中期末葉にかけてのもので、早期末葉～前期初頭のものが主体である。弥生土器については時期を特定することはできなかった。  
石器は、石鎌・石槍・石匙等の剥片石器と、磨石・凹石等の礫石器・磨製石斧・石皿・石棒がある。
4. 遺構の年代は、堅穴住居址および土壙、ピットとも縄文時代早期末葉から前期初頭のものとおもわれる。製鉄遺構については年代を特定できなかった。

### [引 用 参 考 文 献]

- 宮城県教育委員会（1969）「南境貝塚—埋蔵文化財第4次緊急調査概報」宮城県文化財報告書第20集  
＊ (1977) 「亀岡遺跡・金山貝塚」宮城県鳴瀬町文化財報告書第1集  
＊ (1978) 「東北自動車道遺跡報告書Ⅰ—上深沢遺跡—」宮城県文化財報告書第52集  
＊ (1981) 「宮城県遺跡地名表」宮城県文化財報告書第73集  
＊ (1981) 「宮城県遺跡地図」宮城県文化財報告書第74集  
＊ (1982) 「天神山遺跡」宮城県文化財調査報告書第89集  
＊ (1982) 「東北自動車道遺跡報告書Ⅱ—勝負沢遺跡—」宮城県文化財報告書第83集  
＊ (1983) 「大倉遺跡、原尻遺跡」七ヶ宿ダム開発現地説明会資料
- 仙台市教育委員会（1980）「三神峯遺跡」仙台市文化財報告書第25集  
＊ (1981) 「六反田遺跡」仙台市文化財報告書第34集  
＊ (1983) 「茂庭」仙台市文化財報告書第45集
- 伊東信雄（1940）「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告  
第2集
- 林謙作（1965）「縄文文化の発展と地域性—東北—」「日本の考古学Ⅱ」河出書房



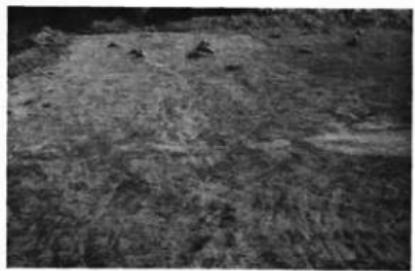
蒲沢山道跡遠景



中央区伐採状況



E' トレンチ伐採状況



中央区北東部



中央区南東部



中央区北西部



中央区南西部



中央区西方向



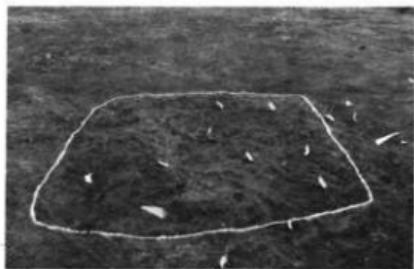
造構検出作業（2・3住）



製鐵址



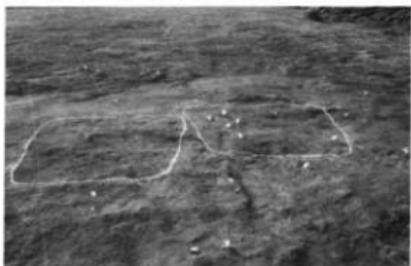
水路跡



1号住居址



2号・3号・4号住居址



2号・3号住居址



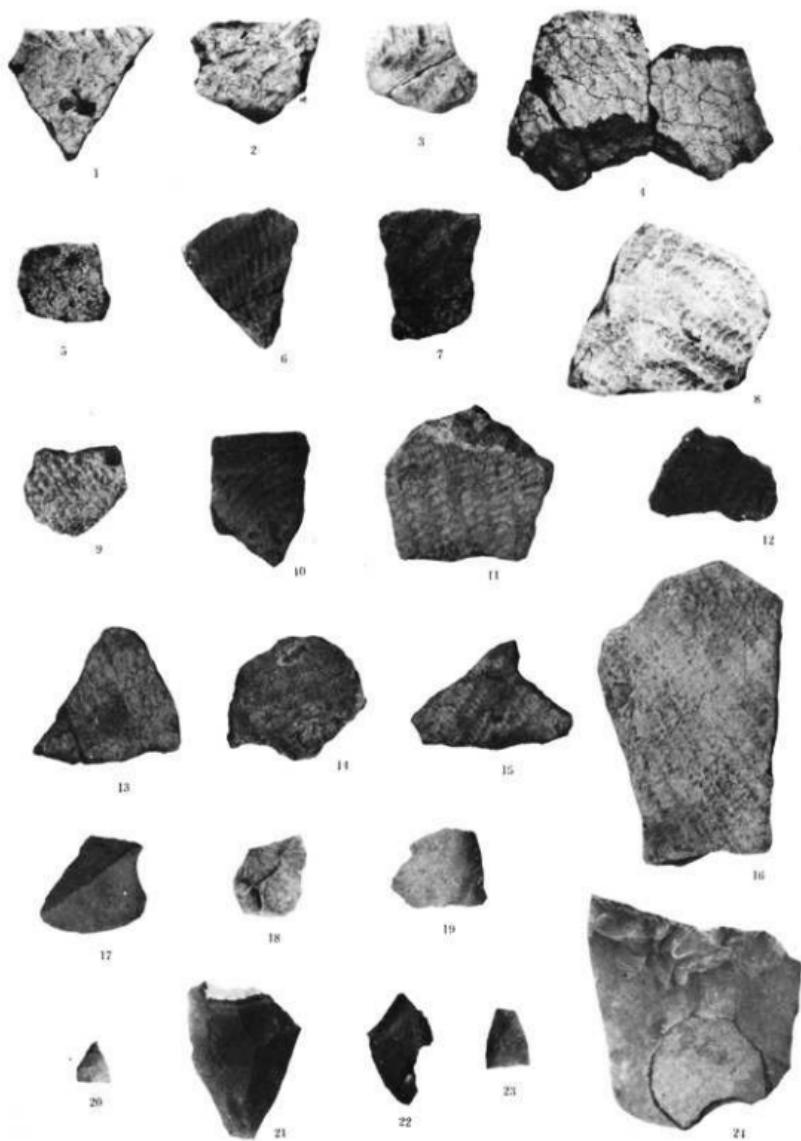
中央区東部（5号住居址）



5号住居址



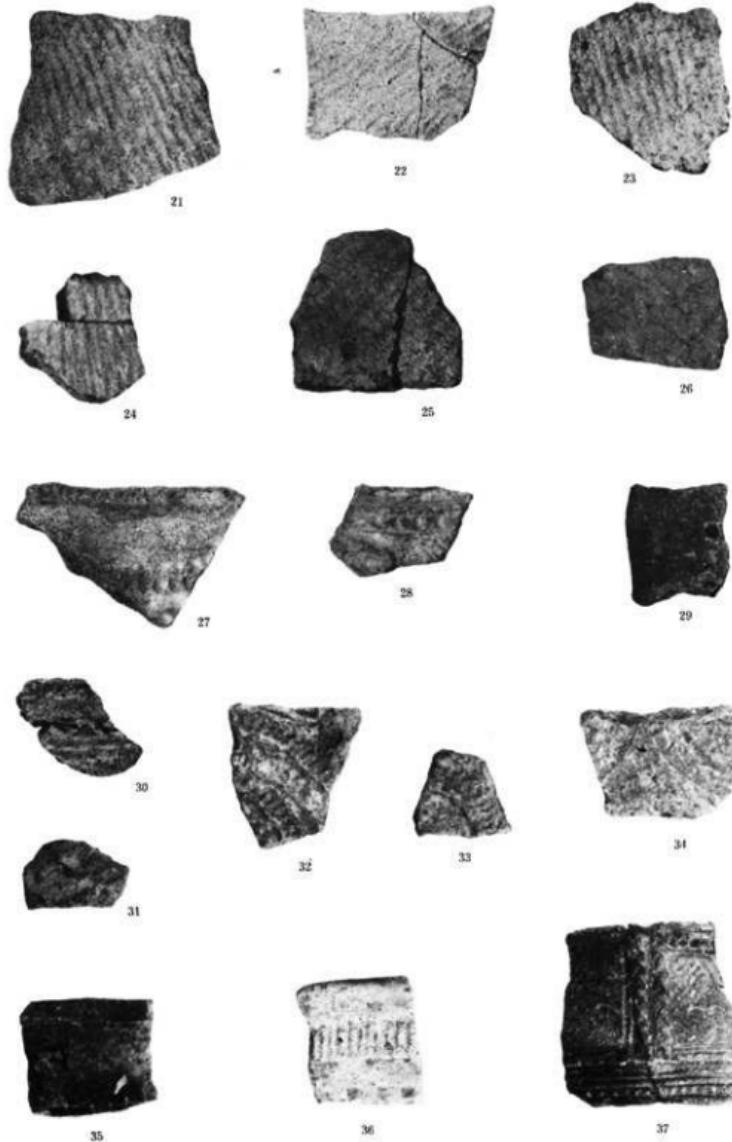
7号住居址



住居址出土遺物



出土遺物 拓本土器(1)



出土遺物 拓本土器(2)



38



40



39



41



42



43



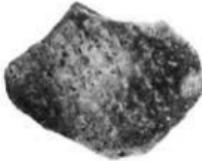
44



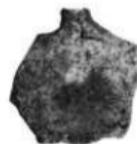
45



46



47



48



49

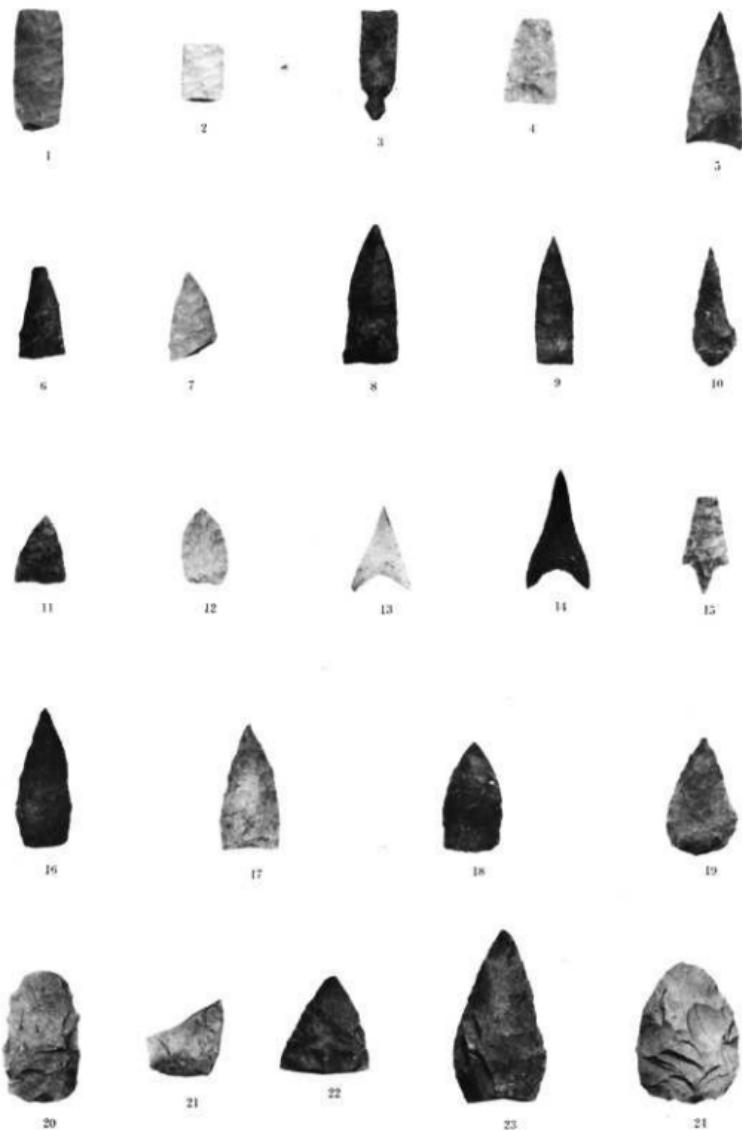


50



51

出土遺物 拓本土器3



出土遺物 石器(1)



25



26



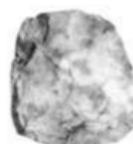
27



28



29



30



31



32



33



34



35

### 出土遺物 石器②



36



37



38



39



40



41



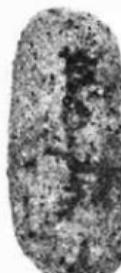
42



43



44



45

出土遺物 石器③



46



47



48



49



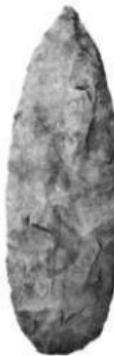
50



51



52



53



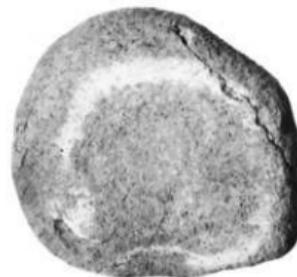
54



55



56



57

出土遺物 石器(4)

## 宮城町教育委員会社会教育課職員一覧

教 育 長	田 中 勝 三
教 育 次 長	桜 井 長 祥
社会 教育 課長	中 野 博
社会 教育 課長補佐	出 副 恒 德
主 事	原 河 英 二
主 事	早 坂 真 由 美
社会 教育 主事	庄 子 俊 夫
社会 教育 指導員	工 藤 信 一 郎

---

## 宮城町文化財調査報告書第4集

### 蒲沢山遺跡

—遺跡詳細分布調査報告書—

昭和59年3月10日 印刷

昭和59年3月22日 発行

発行 宮城町教育委員会

宮城郡宮城町下愛子字觀音堂5

電話 (02239) 2-2111番

印刷 株式会社 セイトウ社

仙台市国分町二丁目3-13

電話 (022) 22-6595番代

---